



逆引き DICOM Book

奥田保男 監修
JIRA DICOM 委員会 編著



その昔（筆者が若かりし頃）、画像診断機器により撮影された医用画像を観察し診断するには、画像化されたフィルムが頼りであり、またフィルムと観察者は常に同一空間での存在が必須であった。今日、デジタル化された医用画像においては、

その存在場所を意識することなく観察可能である。現在では当たり前になったこの環境の実現に、大きく寄与しているのが DICOM という標準規格である。

DICOM とは、Digital Imaging and Communications in Medicine の略であり、1993 年に ACR（米国放射線学会）と NEMA（米国電気機器工業会）が合同で制定した、医療情報交換のための共通規格である。情報交換の媒体としてネットワーク又はオフラインメディア（CD-R など）を使用し、画像のやり取りのみでなく、画像検査全体に関わるワークフローの改善を目的として拡張されている。現在、この規格に準拠しているからこそ、異なるベンダの異なる機器であっても、情報連携が容易に可能となっている。しかしながら、DICOM はベンダごとに異なる解釈をする余地があり、それが各々を接続し通信する際の障害となりうる。よって DICOM 対応機器同士であっても、そのサポート範囲や解釈が異なれば通信（データ交換）できないといったことになる。

本書は、今まで出版されている DICOM 関連の書籍とは趣を異にした、全く新しい視点で構成されている。実際の医療現場で発生している事象を収集

し、その解決に必要な要点を適宜関連付けて解説するという逆引き手法を用いることで、DICOM の必要事項を解説している。よって、病院内で医用画像情報を電子的に保管並びに配信するシステム（PACS）を構築することになった担当者、運用を任されているがトラブル時に頼れる人がいないといった方には、是非お勧めしたい書籍である。

構成は、大項目、中項目、小項目となっており（逆引きは中項目と小項目）、また、付録 1 で詳細説明を、付録 2 で通信トラブル発生時の対応方法を、付録 3 で用語解説を、付録 4 ではウェブ上の情報源を記載しており内容も充実している。例えば、「CT 装置を更新したら PACS に接続できなくなった」という事例においては、まず最初に 17 に大別された大項目から関連する項目を探すわけだが、

- ・大項目 3 PACS とモダリティ
- ・中項目 3.6 モダリティと PACS が接続できない
- ・小項目 3.6.1 PACS やモダリティの装置を更新したら接続できなくなった

といったように小項目を探し出すことができる。記述内容は、「物理的に接続されているかを確認し、大丈夫であれば、更新作業時に接続に関与する項目設定が変わっていないかを確認するように」と解説されている。確認項目として「IP アドレス」「ポート番号」「AE タイトル」を挙げている。また、これらの解説を理解するために必要な本文の項目及び付録の番号が明記されており、内容をより理解するための工夫がされている。

本書は、医療現場にて医療情報に携わる人が待ち望んでいた 1 冊と言えよう。トラブル時だけではなく疑問に思っている点、あやふやな点を確認する際にも有用である。また、新たに医療情報を勉強しようとする人にとっては、より現実的な内容として理解可能であるために副読本としても最適である。書籍サイズは A5 判であり、トラブル時に持ち歩くことを想定されていると思われ、正に至れり尽くせりである。もちろん筆者も出版と同時に購入済みであり、お気に入りの 1 冊である。

（神宮司公二 北里大学病院放射線部）

（ISBN978-4-86003-452-8, A 5 判 184 頁、定価本体 2,700 円、医療科学社、☎ 03-3818-9821、2014 年）